チンギス・アイトマートフ 著
ЧИНГИЗ АЙТМАТОВ 阿部昇吉 訳

# キルギスの雪豹

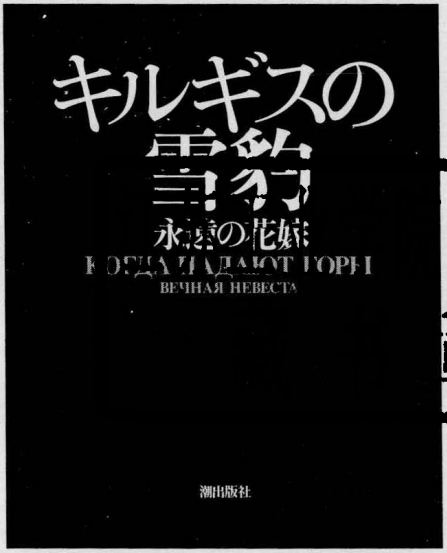
ゆきひょう

## 永遠の花嫁

## КОГДА ПАДАЮТ ГОРЫ

ВЕЧНАЯ НЕВЕСТА

潮出版社




图书馆
章

〈著者〉
チンギス・トレクーロヴィチ・アイトマートフ
1928年生まれ。53年にキルギス農業大学を卒業後、畜産技師として働きながら文筆活動を行う。58年に中編『ジャミリャ』を発表し、ソ連国内のみならず、国外でも注目される。『キルギス文学』編集長を経て、83年にはキルギス作家同盟議長、88年『外国文学』誌編集長に就く。一方、ペレストロイカの旗手としても活躍し、90年3月大統領評議会メンバー、同年11月から91年12月まで駐ルクセンブルク大使を務めた。知識人の国際会議イシククーリ・フォーラムの主催者でもある。『一世紀より長い一日』『処刑台』『チンギス・ハンの白い雲』『カッサンドラの烙印』など、これまで十数編の作品が邦訳されている。また、池田大作・創価学会インタナショナル会長との対談集『大いなる魂の詩（うた）』がある。ブリュッセル在住。

〈訳者〉
阿部昇吉（あべ・しょうきち）
1956年宮城県生まれ。早稲田大学大学院修士課程（ロシア文学専攻）修了。ロシア文学研究家、翻訳家。1999年、パリの国際シンポジウムで、アイトマートフ文学に関する報告を行う。現在、創価大学でロシア語とロシア文学の講義を担当している。主な著書・訳書に『いとしのタバリョーク』（チンギス・アイトマートフ著、鳳書房）、『今すぐ話せるロシア語（入門編）』（東進ブックス）、『やさしいロシア語　カタコト会話帳』（すばる舎）、『すぐにつかえる日本語-ロシア語-英語辞典』（国際語学社）などがある。趣味は将棋と落語鑑賞。

キルギスの雪豹（ゆきひょう）——永遠（えいえん）の花嫁（はなよめ）——

2008年6月5日　初版発行

著者　チンギス・アイトマートフ
訳者　阿部昇吉
発行者　西原賢太郎

発行所　株式会社　潮出版社
〒102-8110　東京都千代田区飯田橋3-1-3
電話／03-3230-0781（編集）03-3230-0741（販売）
振替口座／00150-5-61090

組版　朝日メディアインターナショナル株式会社
印刷・製本　凸版印刷株式会社

©Ч. Айтматов, 2006
©Shokichi Abe, 2008
Cover Jacket Photo ©KATUHIKO FUSIMI／SEBUN PHOTO／amanaimages

ISBN 978-4-267-01798-8 C0097 Printed in Japan
落丁、乱丁本はお取り替えいたします。
http://www.usio.co.jp

## 主要登場人物

※（　）内は愛称や通称

**●アルセン・サマンチン（アルス）**
フリーのジャーナリスト。クラシック音楽をこよなく愛し、「永遠の花嫁」のオペラ化に情熱を注いでいる。

**●アイダナ・サマロヴァ（アイア）**
アルセンの元恋人。オペラのソリストだったが、現在は売れっ子の歌手としてスターダムにのし上がっている。

**●ベクトゥル・サマンチン（ベクトゥル・アガ）**
元コルホーズ議長。アルセンの叔父で、現在は狩猟会社〈メルヘン〉の社長を務める。

**●エレス・ジャーバルソワ（エレス）**
元司書。今は〈担ぎ屋〉として雑貨の卸売業に従事し、三人の仲間と国中を走りまわっている。

**●エルタシュ・クルチャル**
実業家。かつては平凡な役者に過ぎなかったが、見事に時流に乗り、名プロデューサーとして業界を牛耳っている。

**●アルダーク**
アルセンの兄。医者だったが、社会主義時代の名残である、公共サービスに係わる職種の低賃金に嫌気がさして廃業。養犬業を営み、大成功を収める。

**●カディーチャ**
アルセンの姉。夫のオルモンは地元で鍛冶屋を営む。

**●クマル**
エレスの姉。ジョローはその夫。

**●クマシ・バイサロフ**
新聞〈新しき道〉の編集長。アルセンの仕事仲間。

**●タシュタンベック（タシュタナフガン、タシャフガン）**
アフガンからの元帰還兵。アルセンの同窓生で、現在は狩りの勢子（せこ）の中心的存在。

**●サクサン（サクサガイ）**
アルセンの同窓生。元教師。〈担ぎ屋〉の経験もある。勢子の一人。

**●ハッサン、ミシェル**
アラブの大富豪。いとこ同士で、雪豹狩りをしにキルギスにやって来る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

◇

●ジャーバルス（尾長の頭でっかち）

雪豹。かつては同族を率いるリーダーだったが、今は力が衰え、群れからは爪弾きにされる。峠を越えて終の住処を目指す。

◇

●セルゲイ（セールギイ、セリョージャ）

第二次世界大戦時の新兵。ボルガ河畔のサラトフから戦場に向う。

装幀　鈴木正道（Suzuki Design）

# キルギスの雪豹

——永遠の花嫁——

# 1

誰にも運命は予知できない――これは常に、万人に当てはまる不変の事実である。生まれつき何が定まっているのか、それぞれに何が運命づけられているのかを明かすのは、生それ自体が担う役割だ。でなければ、運命は運命たりえない……。これは、この世が創り出されて以来、アダムとイヴが楽園を追われたときから常にそうなのだ。そして、日々刻々と時が過ぎ、幾世紀を経た今でも、すべての人間にとって、運命の神秘は、永遠に謎であり続けている。

そうして今、同様の事態が引き起こされようとしていた。そう、今回もまた全く同じことが生じるのだ。人智を超えたこの出来事を、おそらくは神の仕業を、いったい誰が予見しうるだろう。

それでも無理を承知で唯一、推測可能なものがあるとするなら、それは、これから語る二つの存在の間にある、ある種の星の廻り合わせ、つまり運命の意志によって同じ星のもとに両者が生まれたという意味での、宇宙的な繋がりである。ではどうしてそうなったのか……。

もちろん両者とも、互いの存在など思いもよらなかったし、想像すらしていなかった。というのは、一方は街に、市場や串焼きの煙でむせかえる酒場で溢れかえった、過剰な人口の密集する現代の大都会に暮らしていたからであり、もう一方は山岳部に、ネズの木がうっそうと生い茂り、

日の当たらない雪で半年ものあいだ覆われた斜面や、岩のそそり立つ未開の峡谷に生息していた雪豹（ユキヒョウ）だったからである。

高山地帯に関する学問では、それは、トラなど同じネコ科のヒョウ属に分類され、学名をテンシャン・ユキヒョウと言った。生息地の人々の間では、「ジャーバルス（矢豹）」と呼ばれるが、この名は、本当に矢のように素早く跳躍するという、その本性に何よりもふさわしいものだった。それからまた「カール・ケチケン・イリビルス」とも言われるが、これは「胸まで雪につかって進むもの」の意味で、これもまた事実に即している。他の獣たちは、ただひたすら山の雪に捕まらないように道を探すものだが、何と逞（たくま）しいことに、雪豹は雪をかき分け、まっすぐ進むのだ！

豹が獲物を狩るのは、大体、日中である。その時分になると、山では草食動物が水を飲みに、野生のノロやアルガリが様々な方角から、渇きを癒しに水の流れる河川にやってくる。水飲みは秩序正しくなされる。ときにそれは丸一昼夜も続き、翌日までかかることもある。いついかなる瞬間も危険から逃れられるように、まるで地面にほとんど触れていないかのように、軽やかで弾むように跳ねながら、彼らはバネみたいに地面から飛び上がって道を進む。しかも走りながらじっと目を光らせて、しっかり聞き耳を立てながら、小さな集団で隊列を組んで進むのだ。

しかしながらジャーバルスは、自分の肉食獣としての生業（なりわい）を、非常によく心得ていた。物陰に見事に隠れて、彼は獲物を待ち伏せする。崖から（これが最も成功するパターンなのだが）、一瞬で思いがけないくらい上に跳躍するか、あるいは藪の陰から不意に側面を襲い、獲物を倒して即座にその喉（のど）を噛み切る。喉は沸き立つ熱い鮮血に染まっていき、そのあとのことは、ご存じの通りである。

だが、群れが充分に水を飲んだ後に追いかけて、獲物を襲うほうがもっと良い。そのためには、



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とにかく近くで待ち伏せしなくてはならない。そこで少しでも身じろぎするものなら、もう大変なことになるのだ！　たとえ生きた肉体が、ほんのひとっ飛びで手の届くところにいても、我慢強く待たなければならない。ノロが華奢な頭を急に持ち上げ、耳を動かし、用心深く眼を輝かせながら、前脚を踝まで水につけて、音も立てずに水を飲み続ける間、はやる気持ちを必死に抑え、しっかりと目を見開いてじっと待たなければならない。ノロが音を立てて水分を補給すればするほど、豹の狩りの成功率がますます大きくなるのだ。もしも狩りが直線コースになりそうなら、必ずしも試みる必要はない。相手は、もう本当に足が速いのだ。音よりも速く走り（ここに彼らの救いがある）、旱魃の際にこの低木地帯に時折迷い込んでくる野生の豚みたいに、鳴いたり金切り声をあげて、恐怖のあまり走りながら脱糞したりはしないのだ。だがそんなノロでも充分に水を飲むと、いつもほどの俊足ではなくなるので、水飲み場から動き出す瞬間に、間髪いれずに行動すればよいのである。

昼近く、ジャーバルスは泉の付近で狩りがしたくなった。音を立てて流れる小川に沿って、いつものようにゆっくりと茂みを通り抜け、辺りを見回し、彼は振り返った。もしかしたら後方に、体に斑模様をつけた同じ雪豹が現れるかもしれなかったからだ。そんな望ましからぬことがよくあった。特に家族が群れで狩りに出ている場合は、尚更だった。余計に不愉快な思いをして、互いに威嚇しあって、吼える必要なんかないじゃないか！　狩りは単独でやるほうがいい。ジャーバルスは先に進んだ……。

初秋間近の日だった。天山の高山地帯の、この上もなく良いこの時期は、吹雪がやって来るまで間があったので、まだ峠を通ることができた。野鳥はみな夏の間に脂がのって一番味の良い状態、美味い体つきをしていた。鳥たちは、まだがやがや騒いだり、ピーピー鳴いたりして好き勝

手にはしゃぎ回って、ひな鳥もすっかり丈夫になっている。だが冬が近づくと、ここには一羽も残らず、次の夏まで姿を消すのである。ここで冬を耐え抜くなんて、不可能だからだ。

水飲みしようとぶらつくノロが現れはしないか注意しながら、ジャーバルスは低木の茂みや崖で、自分の斑の毛皮が目立たないように、周囲と同化しながら進んだ。上背があり、がっちりした首筋で、際限のない可動性のある、大きくて重い頭。猫のような耳と、闇の中でレーザーのように光る、じっと凝視する眼。引き締まった胴体は長くて力強く、びっしりと毛で覆われた絹のような皮に、くっきりと斑模様がついている。それは歌に歌われた、巫女（みこ）や汗（ハン）たちを乗せた豹の姿に等しかった。堂々と大地を踏みしめる勇姿が、アフリカの同族の豹と酷似していて、尻尾も同様に長く堂々としていたのを、ジャーバルスは知っていたのだろうか。事実、同胞の豹は、獲物に襲い掛かるのに都合の良いように、猫みたいに木によじ登らなくてはならないのだが、アフリカのように巨大な木々は、この四、五千メートル級の高山にはない。雪豹のほうは、岩山や断崖をよりしっかりとよじ登る定めにあった。森が生い茂っているのは、この地方では下方の谷間で、そこの木の上の枝で暮らしているのは、恐らく山猫族だけだった。たまに雪豹がその森林地帯に紛れ込んだりすると、山猫たちが、互いの同族関係を認めないかのように、鼻息を荒げて威嚇してくることがよくある。だが雪豹には別の、高山の世界が存在しているのだ。そこの住人に奉仕してくれるのは天の山々だけであり、そこでの狩猟には、簡単には手に入らないノロやアルガリとの格闘と、徒競走が待ち受けている。

やがて方向を定めると、ジャーバルスはポジションを選んで、さほど大きくない川の岸にある茂みの、岩の間に横たわった。気持ちを整えながら爪を研（と）ぎ、身を潜めた。きっとノロが水を飲みにやってくるに違いない。高慢で、かつ臆病そうに頭をもたげながら、斜面の端を、一列にな

って七頭ほど群れていたのだ。ジャーバルスは遠く岩の裂け目から、さっきからずうっと群れを偵察していた。そして今、期待で身がすくんだ。

太陽は高く明るく輝き、まばらな明るい雲がたなびきながら、天山山脈の氷の頂に触れていた。老練な獣の予感どおり、万事順調だった。ただジャーバルスが内心警戒していたのは、偵察の姿勢で岩の間に身を潜めていると、これまでにないほど、あからさまに息が荒いことだった。もちろん、速く走ったり激しいジャンプをしたときや、メスを賭けてライバルと怒りに満ちて戦うときなどは、激しく大きな息遣いもするし、声がしゃがれたりもする。敵に一斉攻撃されたときや、周りのもの全ての息の根を止めようとしたりしたら、そういうこともある。でも、集中力が必要なときに、待ち伏せしている場所に完全に溶け込むことが要求される、じっと待ての姿勢で、全ての注意力が外に向けられているときに、こんなに喘いではならないのだ。そのうち、彼は自分の吐く息と吸う息の音が、それぞれはっきり聞こえるようになってきた。こんなことは初めてだった。心臓の鼓動も以前より激しくて、耳の中で鳴り響く気がした。

大体、近頃、ジャーバルスの暮らしに多くの変化が生じていた。というのは、去年の冬から彼は、群れからつま弾きにされ、単独で生きる、獰猛な一匹雪豹になってしまっていたのである。こういうことは、老いとともに起こるもので、実はかなり前から予兆はあった。彼の伴侶を目当てに、若い新しい雪豹が姿を現すようになってからというもの、以前と違って、彼は誰にも必要でなくなったのである。凄まじい戦いだったが、ライバルに打ち勝つことは出来なかった。その後、もう一度闘い、死ぬほど噛み合ったが、またしても余所者を追い払うことが出来なかった。その「耳曲がり」（片方の耳が、明らかに以前の戦闘でずたずたに引き裂かれていた）は、稀代の悪党で、しつこくメスの雪豹に付きまとって、始終這いずり寄っては、いちゃついたり威した

りしていたのだ。しかも、それらすべてが、ジャーバルスの目の前でなされたのである。最初の連れ合いを山の地震で亡くした後、このメスの雪豹とジャーバルスは長い間一緒に暮らして、二度も子宝に恵まれたのだが、とうとう、新しいオスの耳曲がりと去っていってしまった。それも、時に尻尾を左右に揺らしたり、もたげてみせたり、また時には急に跳ね上げたかと思うと、弓のように回したりして、新しい伴侶に脇腹や頬をすり合わせながら、誇示するように平然と去っていったのだ。

そのときジャーバルスは、後ろから襲いかかろうとした。追いついたのだが（奴らは窪地を小走りに進んでいたから、追いつくのはたやすかった）、しかし全く無駄だった。やはり以前と同じ結果に終わったのだ。再び野蛮な戦闘が始まったのだが、しかし今度はメスの豹がジャーバルスに襲いかかり、引っ掻くわ、噛み付くわで、これがジャーバルスに最終的な敗北をもたらす止（とど）めの一撃になった。群れでのかつての位置を維持し、ヒョウ族におけるオス親として、第一位の優先的な役割を奪回しようとした試みは、打ち砕かれたのである。

後になって、多少冷静になってから、大人になりたてのまだうら若いメスを奪い去ろうとして、隣の群れに興奮して立ち寄ったりもした。そしてそこでも戦いは容赦のないものとなった。というのも、オスが三匹とも襲いかかってきて、やっぱりうまくいかなかったのだ。メスとその花婿候補の群れは、自分の立場を明確にして問題を解決しようと、一番近くの谷間に疾駆した。が、ジャーバルスだけが取り残されて、自然界における種の存続の戦いで、常に新鮮な湧き上がる力の側にあるという自分の主要な存在目的から、引き裂かれてしまったのである。

最終的にその場を離れる前に、ジャーバルスは付近をしばらくうろついて、じっと立ちすくんだかと思えば、当てもなく走ったり、横たわったり、また起き上がっては、その絶望的な雄叫び（おたけ）

で山々を揺るがした。ああ、出来ることなら、自然の摂理が許すなら、彼はオオカミのように吠えたかった。茫然自失となって、彼はどこに身を寄せたらよいのか、分からなかった。狩りをしようという意欲にさえ見放されてしまった。獲物どころではなかった。まだ年老いるには早い、十分力があって仕損じることのない狩人、経験豊かなジャーバルスが、今は狩りどころではないのを見透かすように、ヤギの群れが安心してその傍をだく足で進んだ。

事実、そうだったのだ。まさにその時、日常性を喪失した不可解な時間の中で、何が自分の苦悩の臨界点であるかを彼は不意に理解した。岩山の頂に立ち、曲がりくねったネズの幹にもたれかかり、当てもなくあたりを見回していると、不意に下方の谷に沿って、雪豹のペアがウエディング・ランをするのが目に入った。互いに初めてパートナーを見つけた若いオスとメスが、漲(みなぎ)る力と情熱に任せて踊るように走りながら、ふざけあって噛んだりしていた。二匹は、自身の固い殻から解き放たれて、この世に舞い出ようと、血を滾(たぎ)らせているかのようだった。どれほど距離が離れていても、二匹の目が誘い合うように輝くのが見て取れた。

思わずどさりと倒れ、へたりこむと、ジャーバルスはうめき声を上げた。もはや自分自身から逃げ出したかった。どこに行けばいいんだろう？　かつて、あのような肉の歓喜に自分も見舞われたのだ。同じように戯れて、メスはヘビのようにしなやかに足元に纏(まと)わりついては金切り声を上げたのだ。隣の群れから引き抜いた未通(おぼこ)のメスとも、同じことがあった。そのときは彼らも、親戚のヒョウの目の届かないところで、二匹でウエディング・ランをしたものだ。犬のようにうるさく付きまとう連中の前では、目立たないようにしたのだ。というのは、この神秘は、全く単独の二匹にのみ、自然界が与えたもうたものだから。ほら、あんなふうに、狂おしい程に性交を渇望しながら、かつては自分たちも疾駆したのだ。同様に、性の魔法にかかる期待で肉体が燃え

上がり、天もその頭上で燃え、目前の山の頂が、燃え上がる瞳の中で揺れたのだ。おお、世界中が音を立てて輝く中、あの新しいペアは、ほら、互いに酔いしれるようなエネルギーを充塡(じゅうてん)しながら、寄り添い駆けていく。やはり秋も間近い日、翌春の頃に山に新たな子が現れ、雪豹という種が続いていくために。

互いにほとんどしがみ付くようにして、二匹は疾駆した。あたかも大海に泳ぐ大魚のように、風に揺れる尾を泳がせながら、胴を伸び伸びと伸ばして走った。習慣的にメスの特権になっているのだが、メスは少し先を、頭半分先んじていた。オスのほうは、ちょうど頭半分遅れて、メスの体臭に酔いしれ、その熱い吐息を思いっきり味わい、メスの心臓の鼓動を聞いていた。そしてそれまで知られていなかった何かが、オスを激しく捉えていた。その瞬間、彼は新たな響き――緩慢で鈍く、かつ甲高い、風にこだまして響き渡る音を耳にした。音は、どこか頭上の光線の中で生じ、強くなり、張りのある大気の動きの中に、急速に沈み行く太陽の光の中に、周りの山や森の揺らめきの中にあった。ああ、それが宇宙に遍満する生の音楽、二匹が結ばれることへの偉大な序曲であるのを、もしも雪豹に理解できるよう定められていたなら……。しかし、それは単なる甘い幻想で、今となっては残酷な現実が残っただけだった。月日が流れ、季節は巡り、幻は消え去ったのだ。

運命の気まぐれは、予測できない――過去もそうだったし、未来永劫にそうなのだ。だから運命を非難しても仕様がない。

余計物の烙印(らくいん)を捺(お)されたその日、自分のメスがみんなの見ている前で、オス同士の一日中続いた戦いに勝利したオスに身を委ねるために、耳曲がりと駆けていったとき、ジャーバルスはその場を去り、近郊をさまよい始めた。内面の抑えがたい遺恨を鎮めようと、彼はさまよった。当て



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com